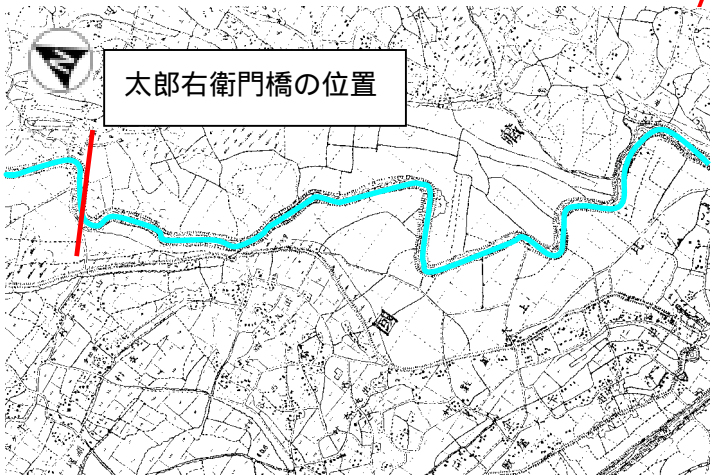


3. 荒川太郎右衛門自然再生地の歴史の変遷

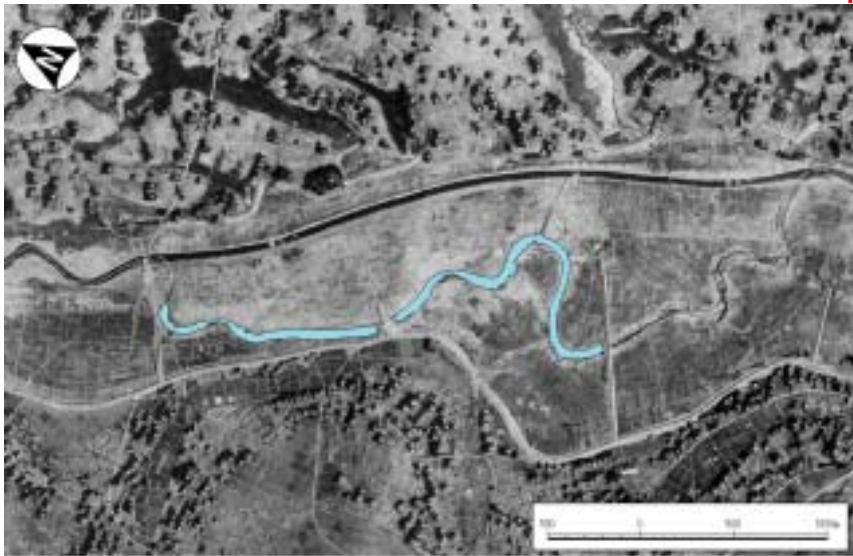
- 本川は直線化以降昭和 30 年代の砂利採取により河床が著しく低下し、また高度経済成長期に水質も悪化した。現在河床の低下は沈静化し、水質も回復してきている。
- 太郎右衛門自然再生地周辺はかつて水田が広がっていたが、昭和 45 年以降の減反政策の影響により、畑作への転向（土地改良） 放棄水田の増加とともにホンダエアポート、モトクロス場などの利用が増えている。
- 旧流路では、土砂の堆積本川の河床低下による地下水位の低下及び周辺農地の嵩上げなどによって乾燥化が現在も進行しているものと考えられる。

表 3-1 荒川水系及び太郎右衛門地区の歴史の変遷

年号		明治43年以前	大正元年～	昭和元年～	昭和10年～	昭和20年～	昭和30年～	昭和40年～	昭和50年～	平成元年～	
社会的状況			● 第二次大戦(昭和16～昭和20年) ● 政府減反政策(昭和45年～) ● 東京オリンピック(昭和39年) 高度経済成長 ● 武蔵水路通水(昭和39年)								
水系全体	河川改修治水等	1629荒川の西遷洪水を繰り返す河川であった。 明治43年大洪水	● 第一次改修工事:荒川放水路(明治44年～昭和5年) ● 第二次改修工事(大正7年～昭和29年):川の直線化、横堤の建設 ● カスリーン台風(昭和22年) ● 狩野川台風(昭和33年) ● 二瀬ダム完成(昭和36年) ● 玉淀ダム完成(昭和39年) 浦山ダム完成(平成10年)								
	その他	古くから人が住む里山環境であった。	砂利採取 河床の低下は鎮静化方向(昭和30代～40年代がピーク) 水質悪化(昭和30年代～50年頃がピーク)								
太郎右衛門自然再生地	河川改修		● 本川が直線化される ● 太郎右衛門地区の横堤(昭和9年～11年) 河床の低下は沈静化方向(昭和49年以降)								
	環境		● 旧流路は止水環境化 乾燥化進行								
	高水敷	周辺は稲作が盛んであった。	水田 畑作増加(昭和45年頃～) 樹林化進行(昭和45年頃～) ホンダエアポートなど利用(昭和39年頃～) 川近くまで水田が広がる 放棄水田が増加、土地改良による盛土、嵩上げ								



【明治14年第一軍管地方迅速測図】



【昭和20年代】



【平成12年】